

---

# 願い

エダマメ屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
願い

【Nコード】  
N7191I

【作者名】  
エダマメ屋

【あらすじ】  
高校2年の戸川翼とがわつばは、廃校された高校でオバケの少女に出会う。  
オバケの少女の願いとは・・・

## プロローグ

誰からも必要とされない世界。

そこには、もう僕の居場所なんてないのかもしれない。

それでも、僕がこの世界にいる理由。

それは、誰かに必要とされたいから。

ありがとうって言ってほしいから。

どうしようもなく小さな夢。

それでも僕はその夢のために生きる。

僕の名前を呼ばないで

地面に投げ出され、ナイフで切り刻んだようなボロボロの看板。  
それには、泉が丘第2高校いずみがあかたいこうこうと記されている。

人っ子一人見当たらないこの高校は10年くらい前に廃校とされた。

老朽化が原因だという。

そんな高校に毎日のように通う僕、戸川翼とがわつばは本当は、新泉が丘第4高校の2年生。

出席日数はギリギリ。

いわゆる不登校ってやつである。

1年のときは、新しい高校に胸おどらせていた。

テストだつてそこその成績だつたし、恋だつてしたさ。

でも、桜が散りはじめて夏の息吹を感じ始めたころそれは突然やっってきた。

あれは数学の時間だつた。

教師の長つたるい話を無視して、窓の外を見つめながら

ああ、夏だな　　なんて考えていた。

すると、ノックもせず普段顔をあわせることのない事務の先生が勢いよく扉を開けた。

いつせいに、扉の方に生徒の視線が集まつた。

僕もその一人だつた。名前をよばれるまでは・・・

「戸川くん、ちよつといいかな。」

事務の先生は豊満な胸を上下させながら僕の名前を呼んだ。  
すぐにみんなの視線は僕に集まつた。

とても、嫌な予感がした。

ガタツ　　——　　といすを鳴らしながら席を立つ。

そのまま、僕は扉の向こうに消えた。

僕は泣いているにも気づかない

事務の先生は、僕がついてくるのを確認すると西オーブンスペー  
スまで無言で歩いていった。

僕もそのあとにつづく。

その間も僕の心臓は高鳴っていく。

「なんなんだよ！言いたいことがあるなら早く言えよ！  
緊張と不安のせいで僕は非常にイラついていた。

後一步で怒鳴りそうになった僕のをさえぎるように先生は言っ  
た。

「落ち着いて聞いてね。あなたのお父さんが交通事故にあわれて、  
とても危ない状況らしいの。」

「——え？」

「おやじが？なにこれドツキリ企画でもあるまいし……  
そう思ったのもつかの間、先生は涙を流す。

僕のことを思ってた？

僕が泣かないでどうしてあんたが泣いてんだよ！

僕は自分が泣いていることにも気づかない。

「っ！」

役に立たない先生を置いて、チャリ置き場まで全力疾走する。

自分が今なにを考えているのかさえ分らない。

ただただ、機械的に自転車のペダルをこいでハンドルを病院まで  
滑らせる。

## 僕の目に映ったものは

普通なら15分かけていく道を今日ばかりは5分で疾走する。

まあ、信号を無視して車道を通つ切つてきたから当たり前なのかもしれない。

病院の正面玄関に付くと同時に自転車を乗り捨てる。

自動ドアが開く間も惜しむくらいにあせっている僕を見て周りは一瞬ビクッとしたが、そんなことは気にしない。

受付に手術室を聞いて、僕は階段をまたも疾走する。

僕が着いたときには手術室の扉は開いていた。

一瞬、手術室を間違えたかと思ったが、中から母の声だったのでここで合っているのだと確信する。

手術は、成功したのだろうか？

それとも――

最悪のパターンが頭をよぎり、一瞬めまいがした。

おそろおそろ手術室に足をふみいれる。

ああ――

僕の目に映ったのは――

頭に白い布をかぶった父の姿だった。

そこで僕の意識は途絶える。

## 僕の周りの歪んだ世界

僕が次に目覚めたのは、家のベッドであった。ちよつと周りに目をやると母の姿が夕焼けをバックに写しだされていた。

しかし、よく見ると母の影の隣にはもうひとつ影がある。父なのだろうか？

でも、記憶をたどれば白頭巾をかぶった父の姿が頭をよぎる。

いやもしかしたら僕は夢を見ていたのかもしれない。

父は生きていたのだ。

きつとそうに決まっている。

父が死んだなんて歴史はきつとなかったのだ。

そう思って二つの影に手を伸ばしてみる。

次の瞬間、オレンジの太陽が雲と重なる。

それと同時に二つの影の唇も重なった。

逆光で見えなかった二つの影は光を失い僕の目にはっきりと写しだされた。

ひとつは母の姿をしたモノ。そしてもうひとつは見知らぬ男の姿をしたモノ。

ああ、どうして世界はこんなにも歪んでいるのだろうか？



僕はただみているだけ

「母さん・・・、父さんはどこにいるのさ・・・？」

僕はかすれた声で問う。

自分でもうすうす気づいているくせにそれを否定してほしくて、  
わらにもすがる思いで問う。

「あら、起きてたの？父さん・・・だった人ならさつき死んだわ。」  
驚いた。父さんが死んだことではない。そんなことは気づいてい  
たから。

驚いたのは、父が死んだことを平気な顔で、遠い昔を語るような  
口調で語る母の姿。

「でもね、心配しないで。これからはこの人が新しい父さんよ。」  
母さんは隣の男の背に手をまわしながら言っただけ。

「でも、あんなに父さんと仲良かったじゃないか！いまさらどうし  
て・・・。」

僕はこの現実を認めたくなくて必死にもがく。

でも、母さんはそんな期待を裏切るようにけろっとして

「そっ？仲良く見えた？」

僕に答えを求めてきた。

吐き気がした。

人間はこんなにも簡単に他人を裏切ることができるのか。

僕はガンガンする頭を抱えながら、当てもなく部屋を飛び出した。

## 僕は必死に走る

この腐った世界から逃げたくて、どこでもいいから隠れたかった。ああ、どうして世界はこんなにも歪んでいるのだろうか？

裸足で走る僕の体力の限界が来たとき、“それ”はそびえたっていた。

普段ならそこは空き地になっているであろう場所に。

“泉が丘第2高校”

まさかその高校でどんなに僕の気が狂ったか……。

今の僕には知る術はない。

\*\*\*

ああ、ついに僕の頭は狂ったか。

そう思った。

だってこの高校はもうずっと使われていなくて、一年くらい前に取り壊しがあった。

そんなあるはずのない高校が僕の目の前にあるのだから。

こんな状況になればだれでも狂うだろう。

家にも帰ってままたにすがりつくだろうか？

でも今の僕は驚きもしなかった。

ただ、冷静に僕の頭が狂ったことを判断した。

そのことを重々承知のうえで校門をくぐった。

そして階段をのぼってみる。

それはかなりリアリティがあった。

ふいに視界が開けたかと思うとそこには1年1組の文字。

なんとなく入ってみた。

ほこりをかぶった机といす。

そして僕の目にとまったものは、もう月明かりしか入ってこない割れたガラス窓。

まるで、磁石に引っ張られているようにその窓ガラスに歩みよって  
いく。

## 僕は目の前の状況を理解できない

窓から見下ろす景色はひどく僕に開放感をあたえた。

この歪んだ世界のどこにもいない感じ。

僕だけの世界。

この窓から飛び出したらきつとそれは今よりも完全なものとなることを悟った。

僕は迷いもせずに窓を飛び出した。

“だめ”

その声を聞いたとたん僕の体は後ろに引っ張られるようにしてしりもちをつく。

「いたっ」

状況の把握ができない僕に対して“それ”は追い討ちをかけた。

“それ”は一人の少女だった。

歳は僕と大して変わらない気がする。

少女は“どうして？”を連呼するばかり。

僕は恐る恐る少女に手を伸ばす。

後ちよつとで触れんばかりのところまで少女はおののいた。

“どうして君はここにいるの”

やっとのことで声にしたのだろう。

はためからみても声が上がっているのが分かった。

そうはいつてもこの声は耳から届いているのではないことがわかった。

直接頭に響いてくるのだ。

「どうしてって・・・。」

“だってこの高校は1年前に廃校になっていてここにあつてはならないモノなのに”

「そしたら君だって同じじゃないか。」

どうやら僕はこの少女を人としてみているらしい。

“同じじゃないわ”

急に声が小さくなったのがわかった。

“だって私は死んでいるのだから”

僕は目を見開いた。

ああ、これがこの整った顔立ちの少女がオバケとでもいうのだろうか？

## 僕の居場所

僕はまた少女に向かって手を伸ばしてみた。

そして少女に触れた。否触れなかった。

僕の手は空しく虚空を切っただけだった。

“ほら……。”

少女は悲しい顔をしながらいった。

口の閉じない僕に向かって少女は語り始めた。

それは信じがたいことだったけど、この状況と少女の話のつじつまが合いすぎていて、信じるほかなかった。

\*\*\*

“私と反対の物質である君。でも精神は物質を超える。分かる？ わからないよね。”

コクリとうなずく僕を尻目に彼女は平坦にいった。

その説明は分かりたくないくらいに分かりやすかった。

“つまりこういうこと”

彼女はゆったりとした動作で窓の外を指差した。

窓枠にある光景はひどく僕の頭をかき回した。

窓の外には僕の姿があった。

うつろな目をして突っ立っている僕。

“分かったよね。だから物質とは、外にいる君の肉体。精神はここにいる君の心、魂。”

理論は分かった。それを分かると答えるには僕は認めなくてはいけないのだ。この現状を。

“まだ、信じていないよね。分かるよ。魂はとっても素直だから僕の心を見透かされた。”

見透かされたというより、見られたという表現が正しいのだろう。

“きつと君の魂は健全な肉体とはまったく逆の方向に向かっている。死という黄泉の方向。だから君の魂は生と死、人間界と天界、地上と天空、穢れと清めの間の世界《聖域》に迷ってしまった。つまりはここのこと”

またも僕の魂は理論を理解してしまった。

“皮肉なものね。あんな健全な肉体をもっている君おも、無条件に闇へと引きずりこむ人間は・・・”

この少女は何もかも知っていた。

それでも少女は何も知らないというのだ。

“私はどうしてこんな穢れた世界にとどまったのかな？きつと天界へいけば何も悩むことをせずにすんだのに。でもきつと生前の私はこんな思いをしてまで成し遂げたかった願い、夢があったのでしよう。でも、私は知らない。夢を知るためには生前の私を知る人間をつかまえなくては・・・”

なかば独り言になってしまった話を、それでも僕は懸命に聞いていた。

“あ・・・ごめんなさい。”

独り言になってしまった自分にようやく気づいたのか、やっと話をとめた。

“でも、きつと君は私のことを知らないだろうから・・・”

はやく帰って両親と仲直りすることが一番だわ。もう死にたいなんて考えないで。”

僕は自分でも驚くほど素直になっていた。

これは魂だからだろうか？それとも僕の心の問題なのかは分からなかった。

むしろ、どちらでも関係なかった。

「僕には帰る場所なんてない。」

少女は反抗していった。

“いいえ、いくらでもある。もう私にはないけれど、あなたは作るうと思えばいくらでも自分の居場所を作ることができる。”

「そんなこといったら君だって居場所を作ろうと思えば作れるじゃないか。」

“だって私は死んでいて、誰も、どこにも受け入れられない。”  
僕はゆっくり息をすって言った。

「今まで君の言っていたことは正確に的を射ていた。でも今一回だけ的是をはずした。」

少女はわからないといった様子で僕の言葉を待った。

「あいにく様僕は今フリーなんだ。それでいて僕の居場所となる場所も見つかっていない。だから・・・」

しばしの沈黙の後に

「僕が君の居場所になる、だから君が僕の居場所になってほしい。僕はすっかりこのオバケという少女に情が移ってしまっただけだ。」

僕の提案を聞いた少女はびっくりしたように僕を見ていた。せめてもの反撃だ、と僕は思った。

でも、少女はすぐにさっきまでのポーカーフェイスにもどると、

「別に・・・あなたがいいなら居場所になってあげるけど・・・。」  
なんていう人間らしく愛らしい言葉を口にした。



## 僕の名前と君の名前

“ はやく体にもどったほうがいい ”

少女は思い出したように言った。

それもそうだ。そう思った瞬間に僕は体に戻っていた。

一瞬頭がくらくらしたが何とか踏ん張ることができた。

頭が覚醒し始めると、今までのことがすべて夢のように感じた。もしかしたら夢だったのかも知れない……。

と、思った矢先僕の右肩に蝶がとまった。

すぐにそれが何であるか僕は悟った。

“ 今までのことが夢だったんじゃないか、って思ってる？ ”

「 そうであってほしかったよ。 」

“ 誓ったのはあなただから ”

直接響いてくる声はどこか陽気さが感じられた。

「 どこへ行くこうか？ 」

とは、いったものあたりは闇に覆われていた。

“ どこでも ”

僕は行くあてもなく歩きはじめた。

“ 名前教えて ”

僕は自己紹介をしていないのを思い出した。

「 僕は蛭日裕太。 」

“ 変わった名前 ”

「 君は？ 」

聞き終わってから、口をつぐんだ。この少女は自分の名前を知らないのだ。

“ 名前考えて ”

「 僕？ 」

いつの間にか少女は人の姿になっていた。

少女はコクリとうなずく。

「うーん？」

悩んだ挙句僕は第一印象で決めた。

「小夜っていうのは？」

“ どうしてそうなったの ”

「君が夜みたいだからだよ」

“ アバウトだわ ”

僕は少女にののしられちょっとブスツとなった。

でもその次に少女は

“ でも、いい名前・・・ ”

そう言くと少女は蝶の姿に戻ってしまった。

もう少し少女を見ていたいと思った僕はちよっぴり残念だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7191i/>

---

願い

2010年10月15日19時22分発行